

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

一橋大学

前期日程

科目

世界史

総括

試験時間	120分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	法・経済 160点、商 125点、社会 230点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

大問3題は例年通り。
 字数はⅠ・Ⅱが400字以内、Ⅲが200字×2題と例年通りであった。
 大問ごとの時代・分野も定番である。

〈特記事項・トピックス〉

Ⅰは一橋大学頻出のローマ帝国解体期から中世初期までの地中海世界に関する出題。昨年同様、指定語句は無かった。
 Ⅱはヨーロッパと植民地(北米・インド)の対応を問う。久しぶりにイギリスが関係した出題である。
 Ⅲ・Bは2002年に同様のテーマで出題されている。過去問を解き込むことが非常に重要である。

〈合格への学習対策〉

Ⅰはヨーロッパ史、Ⅱはヨーロッパ・アメリカ史、Ⅲはアジア史が一橋大学の基本的な出題パターン。これを一応の指針とした上で、ある程度の変化にも対応できる学力を養うこと。過去に出題された問題と類似した問題が出題されるケースが多く見られるので、過去問を研究しておくことが有利である。当然、論述の訓練は不可欠である。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
Ⅰ	論述 (400字×1問)	「カール大帝の帝国」の成立の経緯	ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌの引用文をもとに、800年のカールの戴冠に至るまでのフランク王国の歴史を、ローマ教皇・ビザンツ(東ローマ)帝国・イスラーム勢力との関係性に留意しながら論ずる問題。イスラーム勢力・ビザンツ帝国・西ヨーロッパの3地域の政治・宗教の関係性を押さえた上で、カールの帝国の歴史的意義を理解できなければならない。	標準
Ⅱ	論述 (400字×1問)	18世紀なかばの「グローバルな紛争」	オーストリア継承戦争・七年戦争と、同時期の英仏植民地戦争についての問題。ヨーロッパにおける各国の対立関係、北米・インドにおける英仏の対立関係を有機的に記述できるかどうかポイント。植民地に住む人々の動向を踏まえながら論ずることが肝要である。短期間の歴史事象を問うているため、細かく、正確な知識が要求される。	標準
Ⅲ	論述 (200字×2問)	A・世界恐慌とイギリス領インド B・日本植民地支配下の朝鮮	Aではケインズの史料を用い、世界恐慌後の世界的な貿易構造の変化とインドの政治的・経済的状況についての出題。 Bでは1920年代後半から1940年代前半までの日本の朝鮮支配の位置づけの変遷を問う出題である。昨年に引き続き、日本・朝鮮関係から出題された。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。